

4. エコーセル発生源の機構はよく解らないが、寒冷前線の上にてきた小さな低気圧はいくつもの強い発生源を伴っており、全体として一つの大きな発生源の役割をしている。

5. 寒冷前線の位置決定にはプレフロンタル・スコールラインとの混同をさけるため、偽湿球温位による解析を行なった。

12. 深津林 (名古屋気) : レーダーエコーより見た東海・北陸地方の雪しぐれについて

1962年1月と2月の名古屋レーダー観測資料 (PPI スケッチ及写真) を使って東海・北陸地方に降雪現象を起

こした雪しぐれについて調査した。この期間中の西高東低の典型的冬型気圧配置の日12例を選び、エコー分布と上層風 (850mb 面) の関係を調べ、若狭湾から伊勢湾を通る 850mb 面流線の傾きとエコー分布との間に密接な関係のあることがわかった。

また2月16日のレーダー資料と北陸共同観測資料を使って、寒気団中の不安定線らしい線状エコーを、福井・彦根・名古屋・伊良湖の地上自記紙と対応させて調べ、線状エコーに対応する気象要素の変化を地上資料から追跡することができた。

討論: レーダー気象学の将来展望

## 国際電波科学連合 (URSI) 第14回総会

島 山 久 尚\*

国際電波科学連合 (Union Radio Scientifique International, URSI と略称される) の第14回総会が、1963年9月9-20日東京品川のプリンスホテルを会場として、開催される。このため日本学術会議では、その組織委員会を作って準備を進めている。この連合は7つの分科会に分けて運営されているが、気象に関係のあるのは第2分科会 (電波と対流圏) であるから、今度の総会の第2分科会関係の予定を今わかっていてる範囲で下に記しておく。この連合の総会は、個人の研究論文は一切取り扱わず、各セッション毎に指名された2, 3人の報告者が、与えられた専門分野の最近の研究の総合報告をして、これによって討論を引き出してゆこうというやり方でやっている。

第1セッション (9月10日午後) 対流圏モデル

1. 伝播の理論に利用される対流圏モデルに関する一般報告: プレンメル博士 (オランダ)
2. 大気物理学に関する考察に基づいている対流圏モデル: ミスム氏 (フランス)
3. 大気中の屈折率の直接観測に基づいている対流圏モデル: ブロックス博士 (ドイツ)
4. 電波の伝播の実験結果に基づいている対流圏モデル: エクルント博士 (スエーデン)

第2セッション (9月11日午後) 電波気候学

1. 対流圏伝播に対する気候的影響の概説: サクストン博士 (英国)
2. 対流圏伝播への気候的影響に関する実験結果: デ

ュ・カステル氏 (フランス)

3. 海上および島との連絡の場合の電波気候的影響: 未定 (日本の国内委員会が指定することになっている)

第3セッション (9月13日午前) 気象レーダーと雲物理、プログラムはマーシャル教授 (カナダ) が作ることにしている。

第4セッション (9月13日午後) 宇宙通信に影響をおよぼす対流圏伝播の諸問題

1. 地球宇宙間の連絡における対流圏の影響に関する一般報告: A. E. カリニン (ソ連)
2. 地球宇宙間の連絡における対流圏屈折の影響: K. A. ノートン博士 (米国)
3. 地球宇宙間の連絡における大気に原因する雑音の吸収の現象: ホッグ博士 (米国)

第5セッション (9月16日午前) 伝播に対する土地起伏および植物生育の影響

1. 統計の見地から考察された地面の不規則性の響影に関する一般報告: ベックマン博士 (チェコスロバキア)
2. 土地および植物生育の影響に関する実験結果: グロースコプフ (ドイツ)
3. 伝播に対する回折稜の影響: ミリングトン博士 (英国)

第6セッション (9月17日午後) 対流圏および電離層における guided waves, 第3, 4分科会と合同。

第7セッション (9月18日午後) 決定した題目がない。

1. ミリメートル波の伝播: ストレイトン教授 (米国)
2. 伝播の研究に適用される乱れ理論: ボルジェノ博士 (米国)

\* 東京管区気象台